

【2019年版】 デザイン業務でのDTPとWebのデータ共有

Webデザイナー にし やま 西山 いち ろう 一郎

はじめに

メディアとして紙媒体とWebは別々に存在しているわけではなく、適度な距離でつながっていると考えます。ともにメッセージを伝える手段で、組み合わせて使いこなす方がよい効果を出しやすいからです。当然ながら両者の作業の進め方には使用するデータの流用のしやすさが影響してきます。

そこで、DTPとWebのデザインの現場で、データ共有をいかに無駄なく進めるかがテーマになります。その手法は一度決めてしまえばずっと通用するのではなく、少しずつ変化していきます。この変化を左右する要因には、以下の項目が考えられます。

- ・メディア（送り手と受け手の進化）
- ・考え方（品質やコストなどの価値, 優先順位）
- ・IT技術（ソフトウェア, ハードウェア, ネットワークなどの専門化と融合）
- ・作業環境（簡単に国境を越える働き方）

そこで、本稿では、2019年時点でのデータ共有の動向を、次のような4項目にまとめました。

- ・前提（目的, メリット, デメリット）
- ・基本的な考え方
- ・作業事例（基本編, 応用編）
- ・作業者の変化（分散化）

この中で、データ共有作業を効率良く行い、媒体として高い効果を上げるために、できることを具体的に探ります。例えば、Webデザインの管理（更新）を効率化する方法として定着しているCMS（コンテンツ管理システム）が、DTPとどのようにデータを共有するべきか、その手段をご紹介します。

デザイン業務での DTPとWebのデータ共有の 目的・メリット・デメリット

【目的1】媒体としての相互補完

そもそも、何らかのメッセージを、その送り手から受け手に伝えるのがコミュニケーションであり、媒体の役割です。その媒体を制作する手段として、現在主流となっているのが、DTP（紙媒体など）とWebデザインです。

日常生活のコミュニケーションや企業のマーケティング活動で、DTPとWebデザインのどちらか一方が機能して利用できる状態であれば、活動を円滑に進めることができると考えています。さらにもう一方が代替手段で補完していけば、より効率的にコミュニケーションやマーケティング活動が実を結んでいくのではないのでしょうか。

【目的2】スマートフォンなどの出現による顧客行動や媒体特性の変化

スマートフォンなどのモバイル端末の普及とアプリケーションの拡張性によって、いつでもどこでもコミュニケーション活動が可能になり、これまでであった時間と場所の制約が減りました。そして、その結果、媒体間の敷居も低くなりました。例えば、全てではありませんが書籍を書店に行かなくても、データをダウンロードすればその場で読み始めることが、普通にできるようになっています。かつては、確立されたマス媒体とそれらを補完するWebという図式がありましたが、現在はやはり相互補完の状態です。

また、スマートフォンを含むモバイル端末の普及と通信インフラの整備が進み、さらに仕事のやり方と仕事をする場所に対する考え方も変わってきました。DTPとWebデザインの作業でも時間

や場所にとらわれない、いわゆるテレワークがより広がっていくことが予想されます。

【メリット】

メッセージの送り手のメリットは、手段が増えたことで活動の効果を上げやすくなったことであると考えます。Webでは時間や場所、作業者の制限が緩くなりました。そしてより詳しく、よりわかりやすく伝えることができるようになりました。またPayPal（ペイパル）をはじめとした少額決済の普及とそのセキュリティ対応もメリットとして挙げることができるでしょう。

一方、メッセージの受け手あるいは利用者のメリットとしては、時間の有効利用と、高度な情報を比較的 low コストで世界中から入手できることなどがあります。文字情報を補完する動画の普及や、Webで利用できるサービスとしてのSNSもこの流れを加速しています。

【デメリット】

作業者のデメリットは、紙面などとWebのデータ共有により作業負担が増えることです。DTPとWebデザインで同じまたは補完する内容（コンテンツ）を制作する場合、その手順は意外と複雑です。特に、同じ作業をできる限り繰り返さず、効率的で正確にデータを共有または活用できるかどうかは作業効率に大きな影響を与えます。

DTPもWebデザインもともにパソコンに専用ソフトウェアを入れて作業をするものなので、データ共有は簡単そうに思われます。ところが実情はそんなに単純ではありません。

次章からは、それぞれのデータの特徴やデータを作成するための作業内容の違いなどを整理し、手順の複雑さを解消する具体的な方法についてまとめていきます。

データ共有の基本的な考え方

DTPとWebデザインの基本的な違いとは？

諸説ありますが、DTPとWebデザインのデータの違いは、両者のルールの違いに集約され、さらにルールが生まれた次の事例1～4のような利用環境などへの理解が重要と考えています。なお利用環境には通信などのインフラのほかに、技術上の仕様や利用するための機器（パソコンやスマートフォンなど）があります。

【事例1】写真データの解像度

画像についてより鮮明さを求めるDTPデザインに対して、PCモニターへの表示スピードを優先させるWebデザインと対比することができます。ブロードバンドではない頃の名残ともいえます。

【事例2】媒体自体のサイズ

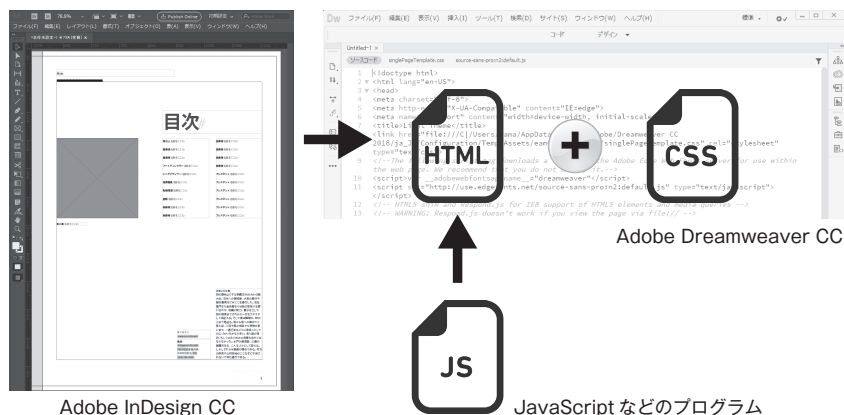
個々の書籍などのサイズ（タテ×ヨコ）内に収めることがDTPデザインの条件です。

一方、Webデザインの場合は利用する機器（デバイス）によって、表示サイズが変わります。PCモニターの場合もあれば、スマートフォンやタブレット機器の場合もあるでしょう。大画面のスマートテレビも想定しなければなりません。

ただし、複数の機器での利用を想定する場合でも、機器の種類ごとにWebページを用意する必要はありません。一つの基本データがあれば大丈夫です。表示サイズが変わった場合には、レスポンシブデザイン（responsive design）という手法で、Webページのレイアウトを調整するファイルで見せ方を制御するからです。そのファイルをCSS（カスケードリング・スタイル・シート）と呼びます。

【事例3】リンク

ごく自然なことですが、WebデザインのみならずHTMLなどで実現するリンク機能があります。



図表1 データ共有事例(1)

このリンク機能はWebサイトの閲覧者に、より多くのWebページをできるだけ負担なく閲覧してもらうことが目的です。またこの機能でページレイアウトをすれば、一つのページ内にテキストとともに、写真や動画などのデータを掲載することが可能になります。

作業のポイント

基本的なルールに沿って進めることが、やはり結果的には効率化につながると考えています。図表2は、データ変換のおおまかな作業内容です。また、図表3はデータ変換に使用するソフトウェアの例です。

【事例4】関連技術の影響の受けやすさ

特にWebデザインの場合は、既存の技術の向上や新たに出現した技術に柔軟に対応していかなければなりません。例えば事例1で取り上げた写真などの画像の場合、スマートテレビ用には高解像度のデータが必要になります。

ここまでデザイン業務におけるDTPとWebのデータ共有の目的と、それぞれの違いについて整理をしてきました。次章からはデータ共有の考え方や、その作業事例の説明に移ります。基本編と応用編に分けて、実際に行う作業内容やその実現のためのツールもご紹介します。

図表2 データ変換のおおまかな作業内容

作業の対象	DTPでの状態	Webへの移行作業
テキスト	ソフトウェア上で配置と装飾	<ul style="list-style-type: none"> HTMLファイル作成 専用フォルダーにCSSファイルを保管 pタグなどを付けCSSファイルで配置と装飾
画像	高解像度データで配置	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて解像度を調整 専用フォルダーに画像を保管 HTMLファイルからリンク
レイアウト	ソフトウェア上で配置	CSSファイルに記述
メニュー	なし	新規作成 (HTMLファイルとCSSファイルなど使用)
ヘッダー	デザインに含む	新規作成 (HTMLファイルとCSSファイルなど使用)
フッター	デザインに含む	新規作成 (HTMLファイルとCSSファイルなど使用)
プログラム*	なし	専用フォルダーにJavaScriptファイルなどを保管

*プログラムについて
 この場合Webサイトをより使いやすくすることを目的に、動きのあるページを実現する手段を指しています。具体的にはJavaScriptファイルなどを使用して、利用者のマウスの動きにより制御されます。

図表3 データ変換に使用するソフトウェアの例

分類	用途	ソフトウェアの名称 (一例)
テキスト	DTP	Adobe InDesign CC, Adobe Illustrator CC
	Web	Adobe Dreamweaver CC, 各種エディター
画像の加工	DTPとWeb共用	Adobe Photoshop CC, Adobe Illustrator CC
	DTP	Adobe InDesign CC, Adobe Illustrator CC
レイアウト	Web	Adobe Dreamweaver CC, 各種エディター
	Web	Adobe Dreamweaver CC, 各種エディター
ヘッダー	Web	Adobe Dreamweaver CC, 各種エディター
	Web	Adobe Dreamweaver CC, 各種エディター
フッター	Web	Adobe Dreamweaver CC, 各種エディター
	Web	Adobe Dreamweaver CC, 各種エディター
プログラム	Web	制作者が配布するものをダウンロードやリンクして利用

共有事例(1) 基本編(手作業)

まずは紙面で配布する会社案内のデータをWebサイト用のデータに変換する事例を取り上げます。図表1はデータ共有のおおまかなイメージです。

各WebページにPDFデータを掲載すれば、印刷用途にも対応できます。通常の場合、Webサイトをそのまま印刷すると余分な情報まで印刷されたり、レイアウトが崩れたりします。CSSでもある程度は解決できますが、PDFデータの方が効率的で、見栄えは良いことが多いのではないのでしょうか。

ソフトウェアの機能の活用

Adobe InDesign CCを利用している場合には、書き出し機能によりそのデータをHTML化することが可能です。詳細は下記のAdobe公式マニュアルをご参照ください。

<https://helpx.adobe.com/jp/indesign/kb/7040.html>

<https://helpx.adobe.com/jp/indesign/using/export-content-html-cc.html>

それでも希望のレイアウトにするためには、多少の修正が必要であるなど、注意すべき点もあります。

ここまで基本編として、紙面で配布する会社案内用のDTPデータを、Webサイトのデータに変換する事例をまとめました。次章では応用編に移ります。

共有事例 (2) 応用編 (CMS)

続いて、WebデザインのCMSを利用したDTPとWebのデータ共有についてまとめます。

Webデザイン管理の主流とは？

前章でご説明したHTML+CSSを進化させた方法がCMSで、より効率的なWeb管理ができるようになりました。CMSの仕組みはページを典型的なパーツに分解して、共通部分を抜き出して集中管理するソフトウェアで、プログラム言語のPHPとデータベースにより実現しています。CMSの中で最も普及しているのがWordPress (ワードプレス) です。

DTPとCMSデータ共有の問題点と限界

HTML+CSSの作業方法を、そのままCMSには使うことができません。より複雑なPHPのプログラムで対応することが必要で難易度は高く、通常はコーダーなどソフトウェア開発の専門家に依頼します。いっそのこと共有は諦め、作業は分けた方が手取り早いのかもかもしれません (専用システムを開発し利用できる場合は除きます)。



図表4 データ共有事例 (2)

DTPとCMSをつなぐ手法

Adobe InDesign CCの場合ではアドオン（拡張プログラム）により、データをWordPressで利用可能なファイルとして移管可能になりました。これでAdobe InDesign CCのデータをWordPressで共有することができます。やはり微調整は必要ですが、大幅な作業時間の短縮につながります。詳細は下記のWebサイト（英語）をご覧ください。

アドオン名：iziExport

（開発者サイト）

<http://www.iziexport.com/>

（製品版）

<https://www.adobeexchange.com/creativecloud.details.15737.html>

（トライアル版）

<https://www.adobeexchange.com/creativecloud.details.101081.html>

Adobe InDesign CCは世界中で使われている

DTPソフトで、そのアドオンの開発者も同様です。今回ご紹介したiziExportは、スペインの開発者によるものです。

資源の有効利用と 分業体制によるデータ共有

最後にDTPとWebデザインのデータ共有を、作業者の観点で考えてみたいと思います。

DTPでもWebデザインでも、作業の体制は、企業中心から専門家の小集団へとますます移行しています。この動きにより、データの共有作業の取り組みに関する課題も、より柔軟な考え方で解決ができる可能性が出てきたと考えています。

具体的には、まずさまざまな資源を有効活用するシェアリングプラットフォームの動きです。次に、一つの場所に集まらずクラウドを活用したテレワークやクラウドソーシングといった仕事のやり方です。適切な情報セキュリティ管理のもと、国境さえも越えて、今後もこの流れは進展していくものと予想しています。